

友の会事業活動から

第31回 アート散步

東京藝術大学大学美術館～東京都美術館

9月12日(木) 参加者22名

友の会会員 Sakurai

10時、上野駅前に集合。先ず「円山応挙から近代京都画壇へ」展を鑑賞しに東京藝術大学大学美術館に向かった。以前から訪れてみたいと思っていた美術館。館内は落ち着いた雰囲気で、心ゆくまで日本画の世界を楽しめた。展示方法も「すべては応挙にはじまる。」「孔雀、虎、犬。命を描く。」「山、川、滝。自然を写す。」「美人、仙人。物語を紡ぐ。」と区分けされて気持ちを一点に集中して鑑賞できた。応挙はじめ日本画家(絵師)の力に圧倒された。特に鹿や猪の眼に魅了され、まさに命を感じた。

11時すぎ、次の会場。東京都美術館では「コートールド美術館展 懸念の印象派」の鑑賞へ、そよ風と蜻蛉と一緒に移動です。

1920年代の10年間に実業家コートールドが自らの目で見て気に入った作品を次々と購入し、自邸においてご夫妻で楽しんだ後、1932年に創設されたロンドン大学美術研究所に寄贈された。研究所での調査を踏まえた展示工夫で、セザンヌ等の後期印象派を深く理解する良い機会を得たと感じた。



東京藝術大学大学美術館で全員集合



「コートールド美術館展」ポスター（東京都美術館）

思い出の美術館

スコットランド国立美術館

長田安代

数年前、ヒースの花咲く荒野の景色を求めてスコットランドの旅に参加した。エдинバラでの自由時間、街を散策している時に雨宿りのつもりで入ったのがこの美術館であった。国立美術館があるのは知っていたが、知識の無かった私は、ロンドンから遠く離れたこの北の地の美術館には全く期待していなかった。

入場料も寄付のみで、他の客と一緒にゾロゾロと入って行く。ところが入場してびっくり。美しく居心地の良い展示室に、スコットランドの有名作家たちの作品のみならず、ボッティチエリからラファエロ、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ティツィアーノ、ベラスケス、レンブラント、フェルメール等々、そして大好きなルノアール、ゴッホ、ゴーギャンまで! 溜息の出る素晴らしいコレクションだった。しかも写真撮影もOK。心躍らせながら展示室を次々と巡った。

本当に思いがけない幸せなひととき。旅の気まぐれな雨のお蔭で心に残る美術館になった。



友の会主催 解説・鑑賞会

「高橋秀+藤田桜——素敵なふたり」展

解説：橋本善八副館長兼学芸部長、池尻豪介学芸員

7月21日(日) 参加者59名

今回の企画展は、3年以上前からの構想という言葉で始まった。「素敵なふたり」というタイトルは、秀さんと桜さんの素敵な人柄から生まれたものだった。橋本善八副館長から企画展実現までの経緯の話があった。

秀さんは、広島生まれ。桜さんは、東京生まれ。ふたりは神様の引き合せにより結婚し、世田谷区に新居を構えた。池尻豪介学芸員からは、秀さんと桜さんの経歴、作品等の解説があった。会場構成にあたっては、「ふたり同時の展示はめずらしく、創作スタイルの違う作品なので工夫した」という説明があった。

秀さんと桜さんは、イタリアで41年間にわたり暮らした。2004年に帰国後、ふたりは岡山県倉敷市にアトリエと住まいを構える。今回の企画展にあたり、インタビューのため倉敷市のアトリエと住まいを訪問した。そのインタビューの中で、「秀さんの桜さんへの最初の印象は?」との質問に、「桜さんは、素敵な人だな……」との答えが返ってきた。現在、秀さん89歳、桜さん94歳。ふたりとも元気、話の内容も豊富で、作品づくりも精力的に行っている。作品の解説とともに、ふたりの写真もいくつか映し出された。「アルデアの自宅の庭にて」では、秀さんの白いひげ、桜さんの赤い服が印象的で、タイトルどおり素敵なふたりだ。

(友の会総務部)



みんなのギャラリー

《静物(ゼラニウム)》

河合岳夫

本作は、三宅一樹先生の美術大学のステップアップ講座で描いたものである。テーマは花だったのに、いつの間にか花瓶とその周辺にシフトしてしまった。はじめ何となく描いた構図や花瓶の影、それに花瓶とテーブルの関係性について、三宅先生から鋭い指摘を受けて、かなり悩んだ。

銅製の花瓶の輝きを斎藤國靖先生直伝の古典技法で出そうとしたが、アクリルガッシュでは油彩とは勝手が違い苦戦し、試行錯誤のあげくに偶然にも表現することができた(と思う)。

この作品は、今年7月初旬、区民ギャラリーで開催された世田谷美術館美術大学30期の展覧会に出展した。初めての展覧会で準備には相当の労力と時間をかけたが、始まるとあつという間に終了の感が強い。今これを書きながら、祭りの後の静けさの中で、美術館2階のアートライブラリーで分厚い花の画集のページを繰りながら、名匠たちの花の絵の陰影を仲間とともに研究した日々を思い出している。



水彩画講座

講師：板倉美智子

5月15日～29日(水・金)全4回 参加者30名

能美 清

流れる雲、風になびく草、渓流のしぶきを透明感のある感じで描きたくて水彩画に興味を持ちました。やってみたいことが友の会の案内にありましたので、急いで友の会に入会して講座に申し込みました。高校の時、絵を描いて以来50年ぶりの水彩画でした。下手でどこが悪いと居直っての入会です。入ってみて何年もやっている方は流石です、上手い。プレッシャーありでした。

好きなように描いて下さいと言う先生。どんな絵でも素敵と言ってくださる先生。褒められると不思議なもので自信のなさが自信に代わり、プレッシャーの時間が楽しい時間に変わる、板倉先生マジックでした。チャーミングでおしゃれで優しい先生でよかったです。

静物画は久しぶりに描くので何も考えず描いたのでよくない出来でした。一方野外スケッチは、構図、技法を考えて臨みましたので時間を忘れるぐらい熱中出来ました。まあまあのでき。先生褒めてくれて(みんなの作品も褒めていましたけど)なんかうれしくて自信作になりました。とても楽しい時間で、水彩画をこれからずっとやっていこうと思わせてくれた講座でした。



水墨画講座

講師：佐藤良助

7月3日～26日(水・金)全8回 参加者27名

篠田 勲

箱根小涌谷の別荘の近くに岡田美術館が2013年に開館した。散歩がてら訪問する機会も増え、日本画の収蔵量の多さに圧倒されている。若冲や松園の作品も素晴らしいが、蕪村や大観の水墨画にも心を惹かれるようになってきた。

油絵と全く異なる材料で自由に瞬間芸のように気持と感情を映し込む水墨画を少しでも理解したいと思っていたところ、水墨画教室の開催を知り飛び込んだ。水墨画を習って上手になりたいという気持はさらさらなく、少しでも近付きたい、鑑賞の縁にしたいという気持である。

1ヶ月の受講は楽しかった。小学校以来の墨のニオイ、筆の感触や紙に筆を降ろす時の緊張は新鮮だった。油絵は徐々に修正を重ねていけるが、又それの楽しみもあるが、水墨画は瞬間が命、とりわけ薄墨の使い方に神経を使つた。尤も先生はおおらかそのもので何でも誉めてくれたので助かった。ひたすら文福茶釜を描いた1ヶ月は至福そのもの。4月にまたまた田谷美術館を訪れ、友の会の掲示を目にし、入会して出会えた喜びだった。



銅版画講座

講師：浦辺佳奈枝

6月5日～21日(水・金)全6回 参加者13名

奥谷幸裕

世田谷美術館美術大学で初めて銅版画を習い、興味を持ちました。引き続きステップアップ講座を受講したかったのですがスケジュールが合わず、今回友の会の講座を受講しました。

美術大学では、藤田嗣治やロートレックを手本にしたので、今回はオリジナルに挑戦することとし、あれこれ考えたのですが、4月に父がなくなり、実家にあったアルバムを整理したところ、父と一緒に写真と店先(薬局)で“シェー”をしていたピンボケの写真が何とも懐かしく思えたので、この写真を一度絵におこして版画にしてみました。7月2日より美術大学30期の展覧会にも出展するとともに、新盆に飾ろうと思います。

制作にあたっては浦辺先生から丁寧にご指導いただくとともに、友の会の方々にも大変お世話になり、誌面を借りて御礼申し上げます。今回美術大学では習わなかったメゾチントの技法は、友の会の講座でも時間がなくてできませんでしたので、次回では時間をつくって挑戦してみたいと思います。銅版画は自宅ではできないので、このような場を今後も積極的に活用してまいりたいと思います。



木口木版画講座

講師：鬼塚満壽彦、中野彰久

8月21日～9月25日(水)全6回 参加者15名

芹生輝子

版画を初めて13年。展覧会で木口木版の作品があることを知り、その繊細さにいつも憧っていました。いつかこんな作品を作りたいと思っていたら今回習うタイミングを知り早速申し込みました。

いつも作っている板目木版とは彫刻刀も板の下準備も進め方も彫り方も全く違ってとても新鮮です。鬼塚先生と中野先生の丁寧な説明で、木口木版の始まり、歴史を知ることが出来、資料も豊富に用意がありました。板目とは表現が違うので、私は悩みながらゆっくりペースですが、一緒に講座を受けている方々はさくさくと仕上げています。それぞれのペースで進められ、そしてどの作品も素晴らしい、こういう視点があるのかと毎回驚きがあります。サイズが小さいので置き場に困らず、家で思い立った時、すぐ取り掛かれるのも続けやすいと思います。

版画の経験者といえども木口木版はゼロからの初心者で上手になるにはまだ経験が必要ですが、自分なりに納得の作品が仕上がるよう頑張っています。



* 本年開催された第69回板院展において、本講座受講者の佐藤礼子さん(院友賞)と山口眞生さん(ニュートン賞)が受賞されました。また、吉居幸子さんが新たに院友に推挙されました。

友の会講座 早矢仕素子講師に聞く

1991年から友の会油彩講座の講師をお願いしている早矢仕素子先生(独立美術協会会員、女流画家協会委員、日本美術家連盟会員、多摩美術大学非常勤講師)にお話を伺いました。

Q1. 武蔵野美術大学大学院ご卒業の頃までの経歴をお聞かせ下さい。

小学4年生の時に、母が使っていた絵具箱を横取りして油絵を描いてみたら、面白かったのを覚えています。また幼いころから家にあったルドンやルソーなどの画集を絵本代わりに見ていて、絵にはなじみがありました。その後演劇が好きな母の影響もあって、中学時代から一人で唐十郎、寺山修司などのアングラ劇を観るようになり、舞台美術を自分でもやってみたいと思って、舞台美術家を目指すにはまず絵を描けたほうが良いということで油絵コースに進みました。大学院修了後は助手として4年、それから彫刻家の若林奮さんのアシスタントとして2年、軽井沢のセゾン現代美術館の作庭などを手伝いました。その中で、若林さんから「ピラミッドは地面か空かどちらに所属する?」という投げかけ等があり、自分で『空間とは?』の答を探るという良い経験をしました。

Q2.これまで画風はどのように変わりましたか?

卒業時は人物と静物の作品が主でしたが、大学2年の時にアルバイトで青森の十三湖に行き、廃船の木材で作った埠(カッショ)や附近の寂しい風景を津軽シリーズとして描きました。21歳のときに洗礼を受けたのですが、その後は聖書で出会った「人間が作った物はいつか滅ぶけれど滅びない物がある」という所にはまって、40歳位で新しいシリーズ



を始めました。その後、10年前に出会った女性牧師の説教が、毎回胸にグサッとくるのでそれを絵で表現しようと思い始め、その聖書の箇所に合うにはどのような構図にすればよいかと考え始めて描くのですが、鑑賞者から絵のモチーフの場所を聞かれるのがいやで、空想した風景の空間に自分を呉わせる何かを入れてみたり羊を描き込んだりしています。羊は時に自分、時にイエス・キリストとして。

Q3. 油彩講座で教えるときに気づかれる点はありますか?

小学校で3年間絵を教えた時は、校内のいろんな所へ連れ出し自由に描かせる事が自分の役目だと思っていました。大人を教える時も基本は変わらず、絵を楽しく描く事の手助けをすればいいと考えています。しかし、年齢のいった方たちは頭もできてしまって習うという感覚が強かったり、デッサン、水彩、油絵と妙な順番を付けるんですが、私は順番も何もないと思います。それと油絵具は色がきれいで、いろいろな描き方もできるので良いと思って油彩講座で教えています。

Q4. 油彩を学ぶひとへのアドバイスをお願いします。

油彩は他に比べて自由な画材なので一度は触れてみてください。いやなら全部白く塗ってゼロからやり直せば良いので。それに匂いに抵抗があってもこんな楽な画材はないと言われていて、その後の人生が楽しくなると思います。また途中で壁に当たったときは、視点や手段を変えてみるのも一つの方法だと思います。心を解放するお手伝いをするのが私の役割です。

(インタビュー：友の会広報部)

* 友の会では現行年度の油彩講座(令和2年1/17～3/6、全8回、定員35名、先着順)の募集をしております。ふるってご応募ください。

分館ギャラリートーク

◎清川泰次記念ギャラリー

解説：樋口茉呂奈学芸員 8月24日(土) 参加者21名

4月2日から10月6日まで開催された「清川泰次 具象から抽象へのあゆみ」展にあわせ、ギャラリートークが実施された。清川泰次(1919-2000)は1950年代と60年代に2度の渡米を経験し、描く対象の形態を写し取ることに捉われない独自の芸術を探求した。その生涯は、色・線・形による美の探求に捧げられたと言える。展覧会では、画業の前半にあたる1960年代までの作品を紹介していた。

樋口茉呂奈学芸員の丁寧で心のこもった解説で、参加者一同、充実した時間を過ごすことが出来た。感謝。(友の会総務部)



◎向井潤吉アトリエ館

解説：池尻豪介学芸員 9月21日(土) 参加者19名

4月2日から10月6日まで開催された「草屋根と絵筆 向井潤吉のエッセイとともに」展にあわせ、ギャラリートークが実施された。本展では、民家シリーズの代表作をはじめ、向井潤吉のエッセイに登場する作品を存分に楽しむとともに、今回初公開の油彩帯(帯に油彩画が描かれている)作品を観ることができた。

池尻学芸員のていねいな解説により、変貌する戦後日本の側面を見つめ続けた一人の画家のまなざしと消え去っていく風景への憧憬を読み取ることができた。(友の会総務部)

* 次回の分館ギャラリートークの日時は分館のチラシや美術館のホームページをご覧ください。



お知らせ

◎今年度の友の会会員証の絵は、森芳雄作《窓辺の女》です。現在開催中(11月24日まで)のコレクション展「森芳雄と仲間たち」でこの作品を観ることができます。実物も是非ご覧ください。

◎友の会会員の特典として提携美術館が割引料金で観覧できますが、提携美術館の一つBunkamura ザ・ミュージアムの観覧料の割引は廃止になりました。

■これからの事業予定

◎秋の美術館めぐり	11/6・7(水・木) アサヒビル大山崎山荘美術館～佐川美術館～MIHO MUSEUM～東近江市近江商人博物館ほか
◎会員作品展	11/20(水)～24(日)
◎解説・鑑賞会	12/7(土) 「奈良原一高のスペイン—約束の旅」展
◎美術講座	12/8(日)「画家の眼で見たボスの『快樂の園』」 講師：画家 能島芳史氏
◎油彩講座	令和2年1/17～3/6(金)全8回
◎アート散歩	未定
◎会員交流会	未定

世田谷美術館友の会に入会しませんか!

会員は世田谷美術館と分館の展覧会が年間無料で観覧でき、会員限定のイベントや実技講座への参加、友の会作品展への出品が出来ます。

申し込みは友の会事務局へ
詳細はホームページをご覧下さい

Tel.03-3416-0607
<https://setabi-tomonokai.jp/>